

だんろ



小学校における「人権の花」贈呈式

2025

上三川町
上三川町教育委員会

あいさつ

昨年開催されたパリ・オリンピックでは、日本選手団が奮闘。海外開催のオリンピックでは過去最多となる45個のメダルを獲得する活躍を見せるなど、数多くの興奮と感動を日本に届けてくれました。

このパリ大会は、史上初めて選手の出場枠を男女同数にした歴史的な大会でもあります。100年前に開催されたパリ・オリンピックでは、女性選手の参加割合が5%に満たなかったことを考えますと、国際社会における女性の社会的地位は「本来あるべき方向に向かっている」と言うことができます。世界から人権問題が解消されていくプロセスの一端を目の当たりにした思いが致しました。

一方で、障がいや国籍による偏見・差別、同和問題、いじめなどの人権侵害は、私たちの身近なところで未だ存在し続けています。一人ひとりの尊厳を守り、お互いを尊重する地域社会を実現するためには、解決しなければならぬ課題が山積しているということなのです。

本町では、地域から人権侵害をなくし、町民の皆さまが、安心して日常生活を送ることができるよう「上三川町人権教育・啓発推進基本計画」を令和4年度に策定し、各種取組を推進しております。人権は法によって与えられるものではなく、すべての人が生まれながらにもっている権利でございます。その権利を守るために、様々な施策を講じて参りますので、今後もご理解・ご協力をよろしくお願い致します。

さて、今年度も人権啓発資料「だんろ」を発刊いたしました。この資料には、町内の小中学生が、実体験を通じて感じた素直な思いや考えが綴られております。

町民の皆さまにおかれましては、収録作品一つ一つをご一読いただき、子どもたちが見ている世界を感じていただくとともに、多様化する人権問題に向き合う機会としていただけますと幸いです。

令和七年三月

上三川町長 星野光利



目次

人権に関する作文優秀作品

私のおばあちゃん

小学四年生

.....

1

ぼくにできること

小学五年生

.....

3

「ぼくができること」

小学六年生

.....

5

覚えていなくても

中学一年生

.....

7

病気を抱えながら働く人と出会って

中学二年生

.....

9

勇気と責任を持った行動を

中学三年生

.....

11

人権に関する標語優秀作品

.....

13

人権に関する作文優秀作品

私のおばあちゃん

小学四年生

わたしの家族には、おばあちゃんがいます。わたしのおばあちゃんは、耳が遠いです。そのため、わたしたちは大きな声で話すことになりました。おばあちゃんが、耳にはちやうきを入れるときだけ、いつもの声の大ききさで話すことができます。

学校で人権の勉強をしているときに、わたしはあることに気付きました。それは、おばあちゃんと話をしているときと、家族と話をしているときの声の感じが少しちがうということです。わたしは、おばあちゃんと話をしているときは、少しおこっているような声で話をしてしまうときがあり、最近では、おだやかな声で話するときよりも多くなっている気がします。

そこで、どうしてそんな声になってしまうのかを考えてみました。

一つ目は、ふつうに話しても聞こえないので何度も同じ

ことを言わなければならないからです。いそがしいときには面どうくさくなってしまう。

二つ目は、わたしはもともと話す声が小さいので、大きな声を出そうとするとつかれてしまうからです。その結果イライラしてしまうのだと思います。

次にわたしは、少しおこったような声で話をされたらどういう気持ちになるのか考えてみました。何もしていないのにおこった声で言われるのは、とてもいやな気持ちになると思います。

おばあちゃんも、とても悲しい気持ちになっていたと思います。だから、今日から気をつけていきたいと思っています。

最近ニュースなどで耳にする高れい者ぎやくたいなどの事けんは、私が気付かずにはちよつとしたイライラが積み重なった結果なのかもしれないと思います。言いたいことがすぐ伝わらなかつたり、何度も聞き返されたりするだけでもイライラすると思います。

しかし、だれでも年をとればそうなります。高れいを理由に相手をばかにしたり、イライラしたりするのはおかしいと思います。

これからは、わたしのおばあちゃんを大切に、まわりのお年よりに対してもいやな目で見たり、ばかにしたり

することなく、やさしくせつしていきたいと思います。

高れい者に関する悲しいニュースやいやなニュースがなくなるように、わたしたち一人一人が、やさしい気持ちと広い心をもつことが何よりも大切だと思います。

ぼくにできること

小学五年生

ぼくが三年生の時、家族でスーパーに買い物に行きました。その時、ぼくのそばを目の不自由な方が通っていきました。その男の人は、もうどう犬も連れていました。ぼくは初めてもうどう犬を見たので、その男性と、もうどう犬をずっと見ていました。すると、他の買い物をしている人にもぶつかりそうになり、ぼくは、あつと思いましたが、もうどう犬がすつとよけて歩いたので、ぶつからずすみ、ほつとしました。でも、その様子を見たぼくは、目が不自由な人は大変だし、一人で行きたい所にも行けなくてかわいそうだと思います。

今年の六月に、学校で、もうどう犬の学習をしました。黒いラブラドルのハルちゃんという名前で、訓練士の指示通りに動いていました。ハルちゃんは、かしこいなと思いましたが、覚えさせるのは大変そうだなとも思いました。そして、お話を聞いた後、実際にもうどう犬といっしょに歩かせてもらいました。見ている時は、短いきよりだし、体育館のいすは大きくないので、かん単だろうと思っていました。でも、初めにアイマスクを着けたときに、目の前

は真っ暗になり、見なれた体育館は全く知らない場所に変わってしまいました。訓練士の方に

「ハルちゃんを信らいして。」

と言われたのですが、ハーネスのぼうを持って、ハルちゃんがどこにいるかも分からないし、ずっと見ていたはずのパイプいすは、どこにあるか分からないし、不安でなかなか進めませんでした。でも、なれてくると、どのくらいの速さで歩けばいいのかや、ぼうを持っているだけで歩きやすいことも分かってきました。本当に、もうどう犬が自分の目の代わりをして、いっしょに歩いてくれるだけで安心できるし、どこでも行ける気がしました。そして、人も動物も「信じる」気持ちが大変だと思いました。

ぼくは、この経験から、何でも一度見ただけや、やってみただけで判断しないようにしようと思いました。例えば、ぼくは、今年の水泳の学習で最初できなかったクロールが、何度も練習してできるようになりました。それと同じように、目が不自由な方も、ぼくが思っているよりも、たくさんの方ができるのではないのでしょうか。目が不自由だといっただけで、「かわいそう」だとか「大変だ」と思うのはちがって、きっとぼくたちと同じように、できなかったことができるとうれしかったり、喜んだりしていると思います。

けれど、何もしなくていいというのではなく、ふだん友達に聞いているように

「何か手伝えることはありませんか。」

と聞きたいと思います。相手のことを思って行動する、これは、しょうがいがある方だけではなく、友達や家族に対しても大切なことだと思えます。思いやりをもった人になれるように、日々考えながら生活したいと思えます。

「ぼくができること」

小学六年生

ぼくの家の近所ではたくさん外国人をよく見かける。

毎朝登校する途中、自転車で工場に向かう外国人労働者に会う。その外国人労働者は肌の色が黒く、一目で外国人と分かる姿をしている。ある日いつものように登校中、横断歩道で止まっていると、「おはようございます」とぼくの前を自転車で外国人労働者が通り過ぎていった。思うようにコミュニケーションが取れない外国人に対して怖い印象を持っていたぼくは、ぼくの方を見る目が鋭くにらんでいるように見えてしまい、あいさつを返すことができなかった。ぼくのとつた行動は外国人に対する差別だったと後から気付いた。差別をしてはいけないと学校で教わっていたけれども、いざとなると行動に出ってしまった。あいさつを返さなければいけないと思いつながらも、なかなか実行することができず、外国人労働者に会うと目を合わせないようになってしまうた。

そんな中、また外国人労働者の人たちに声をかけられることがあった。ある日の下校中持っていた荷物が多すぎて中身が落ちてしまった。そのとき後ろから、帰宅途中の外

国人労働者がたくさん自転車で来ていることに気付いた。

ぼくは急いで荷物を拾ってその場から立ち去ろうとしたけれど間に合わなかった。後ろから来ていた外国人労働者は、ぼくの横で「大丈夫ですか」と声をかけてくれた。外国人に対して怖い気持ちを持っていたので、ぼくは「ありがとうございます」とだけ言ってその場から離れた。遠くから「気を付けてね」という声が聞こえてきた。

家に帰ってこのことをお父さんやお母さんに話した。すると、「外国から来た人にとって日本語はとても難しいはずなのに日本語で話しかけるのはとても勇気が必要だと思うよ」と言われた。きつと勇気を振り絞って声をかけてくれたのに、冷たい態度をとってしまった。困っている人を助けるのは当たり前のことだ。荷物を落としたぼくを気遣ってくれた人は、ぼくが日本人だろうと当たり前に手助けしてくれた。それなのに、ぼくは外国人に対して勝手に怖いというイメージをもち、自分から遠ざかるようにしていた。下校中のできごとや両親から言われたことをきっかけに、ぼくは、外国人とコミュニケーションを取るようになろうと思った。まず始められるのはあいさつだと思い、登校中に会う外国人労働者の人たちにあいさつをするようになった。外国人でも日本人でも一人一人の人間。外国人への差

別をなくすには、その人の育った環境や特徴を知ったり理解したりすることが大切だと思う。人それぞれ違って当たり前だ。ぼくは誰に対しても偏見を持たずに進んで声をかけたり、手助けをしたりできる人になりたいと思った。

覚えていなくても

中学一年生

ある日、私は母と父から祖母に会いに行こうと言われた。「行きたくない。」私は最初そう思っていたが、一変させるような出来事があった。

祖母は認知症になり高齢者施設にいる。そのため三ヶ月に一回会いに行く。そして最初に書いた通り、私は祖母に会いに行こうとさそわれた。私は行きたくなかった。なぜなら、私のことを覚えていないからだ。会いに行っても意味がない。そう思っていた。

それでも私は無理やり連れていかれる形で行くことになった。案の定、祖母は私を覚えていなかった。だから私はしばらく退屈をしていた。祖母とも特に何も話さずしばらく時間が経ったとき、施設の人が絵手紙を持ってきてくれた。最初は誰のだろうと不思議に思っていた。そしてその絵手紙を施設の人が置いたとき、私はぶわっと目が熱くなった。残しておいてくれたんだ。その絵手紙は、私が学校の絵手紙教室で祖母あてにかいたものだった。すると祖母は、私の絵手紙を手に取り、「上手だな。」

と、ほめてくれた。それが誰がかいたのか知らないのに。でもなぜなのか心が温まった。そしてハッと気がついた。それは覚えていなくても気持ちは伝わるということだ。

私は最初、祖母のところへは行きたくないと言っていた。だが私は祖母が好きだった。元気だった頃、祖母の家に行けば、笑顔で玄関で迎えてくれた。家の中に入れば、ごはんを用意してくれていた。そして、たくさん話を聞いてくれて、たくさん話をしてくれた。帰りには私の姿が見えなくなるまで見送ってくれた。この他にもたくさんのお話をしてくれた。しかし、祖母が認知症になって、私のことを誰なのか分からなくなってしまうたら、会っても意味が無いと思っていた。

だが、覚えていることに意義があるのではなく、覚えていなくても気持ちを伝えることに意義があったのだ。伝えたい気持ちというものは、人それぞれ違うかもしれない。例えば、「感謝」や「尊敬」、「感動」かもしれない。私の場合、祖母に伝えるべきことが一つだけある。それは大好きという「愛」だ。それは直接的に言わなくても良い。例えば、私のように絵手紙をかく、手紙を書く、などでも良い。別に物ではなくても接し方でも伝えられる。実際に母と父が祖母に対してやっていたのだが、祖母の話をよく聞き理解

しようとする、そしてそれに反応し答えるということだ。それは祖母がどんなに何を言っているかが分からなくてもだ。分からないからと言って無視をされたり、話半分で聞かれたりしたら、私たち健常者でも悲しく思うはずだ。やっぱり祖母も話を聞いてもらえるとうれしいだろう。とにかく「愛」を伝えよう。そして、思い出してもらわなくてもいい。覚えてもらわなくてもいい。とにかくあきらめずに愛を伝え続けよう。

認知症は、どれだけ大切な人でも、愛していた人でも忘れてしまう。だがそこでかべを作ってしまったてはいけない。私も行きたくないと言った時点で、覚えていないから行っても意味がないと思った時点で、知らぬ間に差別のかべを作っていた。でもそこに、大好きという「愛」の気持ちがあるのであればどのような形でも伝えるべきだ。覚えていなくても通じ合える。そんな偉大な力を持っているのが「愛」であり、私はそれを持っているのだから。今しか言えない、今だから言える。そういうことを大事にしないといけない。

だから今後私は、愛を伝えられる人になる。今を大事に生きようと思う。思いたったらすぐ行動に移そう。その第一歩としてまず祖母に対して作ってしまった差別のか

べを壊し良い関係を築こうと思う。そのために積極的に会いに行き、愛を込めたたくさん話をしたり、聞いたりしたい。今しか伝えられないことを伝えたいと思う。だから、待ってね、おばあちゃん。そして大好きだよ、おばあちゃん。

病気を抱えながら働く人と出会って

中学二年生

母とショッピングセンターへ出かけたときのことです。

母は、目的の商品を探していたものの、どうしてもみつけないことができませんでした。母は、近くで品出しをしようとしていた店員さんに声をかけました。店員さんは、とても驚いた様子で、そして少しとまどった表情でもありませんでした。その店員さんは、「ごめんなさい。少しお待ちください。」と、感じとれるジュエスチャーをして、やや離れた場所にいた別の店員さんの元に行きました。その時私は、何も気付きませんでした。母は、すぐに、店員さんは喉か気管支に疾病のある人なのだと推察したそうです。気管孔カバースカーフをしていたからです。気管孔カバースカーフの方が使用したり、咽頭や首の手術後に首周りのケア用カバーとして用いられているものです。

店員さん同士のコミュニケーションが円滑で、母は欲しかった商品を手にすることができました。母は、「対応してくださり、ありがとうございます。おかげさまで商品がみつかりました。」

と、店員さんに言葉と、手を合わせるジュエスチャーで感謝

の気持ちを伝えました。その場をあとにしながら、私は病気を抱えながら、仕事をするのは大変なこともあるだろうな、と考えていました。母も同じことを思ったようです。

「病気をもちながら働く店員さんに心を打たれたよ。フォローする仲間の人も温かいし、雇用する経営者も理解があつて立派だね。」

と、言いました。

厚生労働省の報告では病気をもちながら働く人は、三人に一人というデータがあります。私はこの数字に「多いな」という印象をもちました。両親が働く職場でも、悪性新生物や慢性疾患など治療と仕事を両立している同僚がいるそうです。そう聞くと、三人に一人という数字は現実的かな、と思いました。常にお互いを支え合いながら業務にあたるそうです。きつと、ショッピングセンターの店員さん達も、それぞれを理解し受け入れ、助け合いながら仕事をしているのだと思いました。

人は誰もが健康でありたいと願います。不自由なく生活していれば、ときに元気であることが当然だと思いがちです。しかし、誰でも体調を崩します。自身の疾病で、やむを得ず休職し、周囲の人にフォローしてもらおうこともあるでしょう。家族の急な病気の為に、予定外の休暇を取るこ

ともあるでしょう。そんなとき、相手の気持ちに寄り添って、ひと言でいいから声をかけることができたなら、お互いの心が軽くなるのではないかと思います。

中学二年の私は、まだ社会経験が浅く、働いたこともありません。私は間もなく、職場体験学習に行きます。多くの場所で様々な人と接していくことになります。ときに、疾患を抱えたり、外見上、判断できない治療をしている人に出会うこともあるでしょう。私が病気になるかもしれませんが、ひとりひとりの立場を理解し、支え合うことができれば、誰もが心おだやかに楽な気持ちで働けると思えます。

どんな便利な世の中になっても、人を助けられるのは人しかいません。自分が持っている、人への想いや温かさを、コミュニケーションをとりながら、行動や言葉で支えられる人になりたいです。

勇気と責任を持った行動を

中学三年生

最近私は、「笑い声」が気になって仕方ありません。私がしたこと、言ったことに対する笑い。他の人たちに対する笑い。笑い声を聞くと「本当に笑ってもよいことなのだろうか」という疑問が湧き出てきます。そして、心の奥に「小さなとげ」が刺さるような感覚がするのです。

他人を笑うという行為はあっても良いのでしょうか。私は決してそうは思いません。他人を笑うのは、「いじり」の一つであると思います。「いじり」は、相手を傷つけようとして行うことではなく、軽い気持ちの人が多くはまずです。しかし、「いじり」によって相手が嫌な思いをするかもしれない。実際、私は誰かに笑われると、自分自身を否定されているような気がするうえ、嫌な気持ちにもなります。そして、「この人たちは私の気持ちは考えていないだろう」という思いが頭をよぎるのです。悪意がなくても相手を傷つけている時点で、それは、「いじめ」ではないでしょうか。いじめは絶対にあってはならない。ほとんど人はそう考えています。一方で、いじりもあってはならないと考える人は少ないはずです。私は、どちらもあってはならないこ

とだと思えます。それには二つの理由があります。まず一つ目は、「いじり」は「いじめ」と同じであるからです。お笑い芸人のように、いじることやいじられることを仕事としている人もいます。そして、それを真似したくなる気持ちも分かります。しかし、私たちの多くは「いじり」をされると嫌な気持ちになるのです。中には、嬉しく感じる人もいるかもしれませんが。しかし、いじられた人自身が、「嫌だ」という気持ちを持っていれば、それはいじめと同じです。二つの違いは「自覚」があるか、ないかです。いじめをする人は相手を傷つけるという明確な目的を持っていますが、いじりをする人はそんなひどいことは思っていない。しかし、自分の言動が相手を傷つけることを自覚しないでやっているのならば、それはとても恐ろしいことです。次に二つ目は、いじりは人の本質を否定することになりかねないからです。「いじる」ことはその人の「個性」を馬鹿にすることと同じではないでしょうか。個性を否定された人が負う傷は計り知れないほど大きいはずです。

相手が傷つくことはやらない。これは当たり前のことです。しかし、この「当たり前」ができていない人が多いと思います。「いじり」をされたら傷つく人がいる、そのことをもつと理解するべきです。たとえ周りの人たちが誰かを

笑っていたとしても、私は絶対に一緒になつて笑いません。周りとは違う行動をとることには勇気が必要です。しかし、私は他人を傷つけないための「勇気」を持って生活していきます。そして、自分の言動に「責任」を持てるようになります。もし誰かを傷つけてしまった時、「そんなつもりはなかった」と言つて逃げるのは無責任で許されることではありません。そのため、常に「自分の言動は他人を傷つけていないか」「この言動で他人がどう思うのか」の二つを自身に問いかけていきたいです。あなたのその言動は誰かを傷つけていませんか。もう一度普段の生活を振り返り、「勇気」と「責任」を持って行動してみてください。

人権に関する標語優秀作品

小学校第一学年

おたがいを おもいきもちは 大せつなともだちをつくる
 本郷小 信夫 伶士郎
 おなじじやなくていいんだよ みんなおなじじやつまらない
 本郷北小 大坪 璃世
 どうしたの？ ぼくがきみを たすけるよ
 上三川小 小杉 凜乃介
 おともだち こせいたくさん たのしいね
 坂上小 枝 葉璃
 とくいなこと にがてなことも みとめあおう
 北小 出井 陽菜
 さかせよう やさしいことばで えがおのはなを
 明治小 岩井 菜心
 ありがとう みんながえがおに なることば
 明治南小 佐藤 柚希

小学校第二学年

思いやり えがおあふれる 明るい未来
 本郷小 田仲 萌恵
 大すきな みんなのえ顔が たからもの
 本郷北小 鶴殿 彩羽
 たすけ合い ゆずり合い 少しの気もちで かわるせかい
 上三川小 鈴木 千陽
 いじめゼロ みんなのいしきで かわるみらい
 坂上小 上野 春葵
 広げよう みんなやさしい 心のえがお
 北小 高橋 杏
 ふわふわことばで ふやそうえがおと やさしいきもち
 明治小 齊藤 涼介
 いじめない ぼくとみんなの みらいのために
 明治南小 関 亮太郎

小学校第三学年

足が不自由な人でも どこにでも行ける けんりはある
 本郷小 田仲 柊斗
 よく見てね 「みんなとちがう」は かがやくこせい
 本郷北小 大坪 湊
 ともだちを やさしくしたら あったかい
 上三川小 櫻井 あかり
 どうしたの？ 気になるあの子に 声かけよう
 坂上小 上野 瀬七
 みんなちがう それぞれの色 かがやく世界
 北小 入江 藍
 しょうがいのあるなし かんけいなく 自由なくらしをしていい
 明治小 佐々木 優真
 相手の気持ち思いやり 気をつけよう 言葉づかい
 明治南小 猪瀬 真椰

小学校第四学年

誰とでも 結ぶ言葉を 大切に
 本郷小 黒川 尚紘
 一人一人が にじ色の心に
 本郷北小 兼子 梨咲
 なかよくすれば みんながえがお 自分もえがお
 上三川小 高久 真優
 きれいだね みんなのえがお なくさない
 坂上小 上野 莉心
 思いやり わすれず笑顔で だれとでも
 北小 小池 桜寧
 ひとりじゃない みんなでつくる 笑顔の輪
 明治小 山崎 歩海
 助けよう こまっていたら 今すぐに
 明治南小 久松 春栄

小学校第五学年

みんなえがおで一歩ずつ みんなで進む ささえ合って

増やそうよ 優しさ 笑顔 思いやり 本郷小 仁平 紺太

声かける 一人の気配り みんなの笑顔 本郷北小 大杉 埜乃

手をひろげ 世界の人と わになろう 上三川小 櫻井 萌惟

みとめ合い みんなの個性 大切に 坂上小 上野 愛來

だいじようぶ みんながいるよ 助け合おう 北小 生井 悠月

人権の 花をさかせて 一人ずつ 明治小 佐々木 敬人

小学校第六学年

平等に 相手の個性を尊重し 笑顔あふれる 生活を

一人じゃない きみの味方は そばにいる 本郷小 古口 蒼将

「普通」とは？ 否定しないで 君の色 本郷北小 尾上 和心

くらべない それぞれひかる 笑顔の輪 上三川小 波風 琴乃

やさしさの 数だけ世界が かがやくよ 坂上小 猪瀬 優

助け合い みんなの気持ち 第一歩 北小 大島 埜乃

ちがうから おたがい分かる いいところ 明治小 前田 紗菜

明治南小 早瀬 友陽

中学校第一学年

82億の 輝く人権 宝物

世界の問題 毎日毎年 みんなで意識 本郷中 高橋 樟羽

多様性 共に支えて 創る未来 上三川中 野沢 怜央

中学校第二学年

あなたと私 好きなこと 得意なこと 全部違って当たり前

その言葉 本当に言って大丈夫？ 発する前に 深呼吸 本郷中 藤井 真悠

勇気ある 行動一つで 変わる未来 上三川中 大塚 春輝

中学校第三学年

大切に 自分の個性(いろ) 認め合おう みんなの個性(いろ)

「普通」ってほんとに一つだけ？ 本郷中 村上 璃桜

みんなが持っているいろんな「普通」 認める心を大切に 上三川中 熊谷 小羽音

すべての人を平等に 人の個性を大切に 明治中 山村 凌央

発刊によせて

二十一世紀は「人権の世紀」と言われております。しかしながら、依然として子どもが被害者となる事案やインターネットによる人権侵害、偏見からくる不当な差別などが散見されます。また、高度情報化、少子高齢化等による社会構造の変化や価値観の多様化に伴い、新たな人権問題も生じてきております。こうした問題の解決には、決して自分以外の「誰か」のことではなく、自分自身や身近な人の問題として捉え、互いの人権を尊重し合うことの大切さについて認識し、他者の人権にも配慮した行動ができるようにしていくことが求められております。

本町においては、国や県の基本計画・方針等を踏まえ、部落差別（同和問題）をはじめとする多様な人権問題の解決を目指して「上三川町人権教育の基本方針」を策定し、学校教育及び社会教育が相互に連携を図り、すべての学校すべての地域において、人権尊重の精神の涵養を目的に、積極的に人権教育及び人権啓発を推進しているところです。また、上三川町教育委員会では、小・中学生の保護者を対象に人権教育啓発資料「明日をにう子のために」を年二回発行し、多様な人権問題を紹介するとともに、家庭での話し合いを呼び掛けています。令和六年度は、インターネットによる人権侵害及びアンコンシャス・バイアスを題材に、一人一人の人権が尊重される社会についての記事を掲載したところです。

さて、この人権教育資料「だんろ」は、町内小・中学生の作文と標語を掲載しております。これらは、児童・生徒一人一人が、日々の生活の中から考えたこと、気付いたことをもとに自分の考えをまとめたものです。上三川町教育委員会では、多様な人権課題に対応した人権教育の取組を、更に充実させていかなければならないと考えております。本冊子は、身近なところから、人権問題の早期解決を目指し、共に生きる明るい町づくりを願う契機になることを願い作成しましたので、ぜひ御一読されますようお願いいたします。

令和七年三月

上三川町教育委員会教育長 氷室 清



ORIGAMI のまち
かみのかわ

人権教育資料 No. 43

発行日	令和7年3月1日
発行者	上三川町 上三川町教育委員会
住所	栃木県河内郡上三川町 しらさぎ一丁目1番地
電話	(0285)56-9190

宇都宮地方法務局・栃木県人権擁護委員連合会主催

令和6年度こどもの人権絵画コンテスト奨励賞受賞作品



「みんな仲よし 世界の和」 上三川町立明治小学校3年 神戸 陽菜



「みんなで野球しようぜ。」 上三川町立明治小学校5年 諏訪 佑乃介